

長谷部郁子（筑波大学非常勤講師）／神谷昇（筑波大学非常勤講師）

要旨

本発表では、山下 (1995:196) で取り上げられている、「本当に N といえるような N」という意味を表す日本語の「NらしいN」表現（例えば、「最近、研究らしい研究をしていない」）が、原則として肯定環境においては許容されず、否定を含意する様々な認可子や否定的なコンテクストを含む広義の否定環境のみにも出現することに着目し、この表現が「弱い否定極性項目 (Weak NPI)」(van der Wouden (1997), 吉村 (1999)) であると提案する。さらに、「NらしいN」表現は、名詞派生形容詞「Nらしい」や、「らしい」と類似する意味を持ち、接辞付加によって派生される形容詞の「Nっぽい/Nくさい」とは意味的・統語的性質が異なることを明らかにし、なぜこの表現が弱い NPI として機能するのかを「最低限の基準値」という概念 (cf. Horn (2001), 五十嵐 (2011)) を導入して考察する。そして、本分析が理論的にも概念的にも好ましく、NPI に関する研究の発展に寄与すると主張する。

0. はじめに

†本発表で取り扱う表現：日本語の「NらしいN」表現

- (1) a. 彼は最近、研究らしい研究をしていない。
 b. 嘘つきの花子だが、近頃、嘘らしい嘘をついていない。
 c. このひと月、雨らしい雨が降っていない。

「らしい」の前後に同一の名詞が繰り返されることにより形成され、「本当に N といえるような N」という意味を表す (山下 (1995: 196))。

- (2) a. *彼はつい最近、とても研究らしい研究をした。
 b. *嘘つきの花子は、昨日も嘘らしい嘘をついた。
 c. *昨日、とても雨らしい雨が降った。

原則として、否定環境のみにも生起し、肯定環境には現れない。

→ 否定環境のみにも生起する否定極性項目 (Negative Polarity Item, 以下 NPI) (van der Wouden (1997), 吉村 (1999))

†本発表の目的

- (3) a. 「NらしいN」表現は「弱い否定極性項目 (Weak NPI, 以下 WNPI)」(van der Wouden (1997), 吉村 (2000)) であると主張する。
b. 「NらしいN」表現の意味的・統語的性質を明らかにする。
c. 類似する表現と比較し、なぜこの表現が WNPI として機能するかを考察した上で、本発表における観察や分析が、理論的にも概念的にも好ましいことを示し、NPI に関する研究の発展に寄与すると主張する。

1. 「NらしいN」表現

†特徴

- (4) a. 貯金らしい貯金ができない：話し手が持っている、貯金という基準に合うような貯金（蓄え）ができない（山下 (1995: 196)）。
b. (i) *私は去年、貯金らしい貯金をした。
(ii) (これまではできなかつたが) 最近、ようやく、貯金らしい貯金ができるようになった。

肯定環境には現れないが、否定的なコンテキストが含意されると許容度が改善する。

†統語構造

- (5) a. [NP [A [N 研究][A らしい]] [N 研究]]
b. *今年は、夏の雨らしい夏の雨が降らなかった。
c. ここ3年ほどは、[NP [A [N 研究発表][A らしい]] [N 研究発表]]をしていない。
d. *まともな研究発表らしいまともな研究発表をしていない。

(5a)：1つめの「研究」が接辞「らしい」に主要部付加して形成される A が、もう1つの「研究」に主要部付加され、NP が投射される。

主要部付加の根拠

(5b)：「夏の雨」のような NP の出現が許されない。

(5c, d)：単一の複合名詞「研究発表」は出現可能だが、「まともな研究発表」のように修飾要素を伴う NP は不可能。

→ 語彙的緊密性

†名詞派生形容詞「Nらしい」との違い

(6) 先生らしい／男らしい／エリートらしい／夏の雨らしい

(7) a. 彼はいかにも先生らしい先生だ。

彼は、所謂先生らしい先生ではない。

b. 彼の作り話はいかにも {*嘘らしい／嘘っぽい／嘘くさい}。

昨日の突然の夕立はいかにも {*雨らしい／夏の雨らしい}。

cf. 彼はとても男らしい。

c. *昨日、雨らしくない雨が降った。

気さくな彼は、エリートらしくないエリートだ。

(7a) : (6)の派生形容詞は否定環境にも肯定環境にも現れることができる。

(7b) : (i) 「NらしいN」内の「Nらしい」は、独立して述語として用いることができない（推量や伝聞の解釈は除外）。

(ii) (6)や、「Nっぽい」や「Nくさい」など意味が類似する名詞派生形容詞は述語として用いることが可能。

(7c) : 派生形容詞の「らしい」と違い、「NらしいN」内の「らしい」を否定形にすることは不可能。

(8) [AP [NP 夏の雨][A らしい]] (cf. 高橋 (2015))

NP「夏の雨」が「らしい」の補部に生起し、APが投射される。

†類似表現「Nっぽい」や「Nくさい」(山下 (1995)) : (7b)

(9) 嘘つきの花子は、いつも、{嘘っぽい嘘／嘘くさい嘘}をついている。

(9) : 肯定環境に現れることが可能で、これらの接辞を含むNPIは存在しない。

「らしい」「っぽい」「くさい」:「基体名詞句が示す特徴を多く有する」という意味を共有
(6)の「らしい」: 多くの場合、基体Nが示す良い特徴が際立っていることを含意

(cf. 山下 (1995))

(ただし、「政治家らしいあくどいやり方」など、文脈次第で悪い特徴を強調する例もある)

→(7b) : 悪い特徴を表す「嘘」や、際立った特徴がない「雨」といったNを基体とすることができない。

→これらのNは、基体Nが表す特徴の性質とは無関係に、「話し手が持っているNという基準に合うようなN」といった基準点を示すNPIである「NらしいN」には、生起可能である。

→「NらしいN」表現を、名詞派生形容詞と区別し、WNPIとして扱う。

2. 弱い否定極性項目 (Weak NPI)

†否定極性項目 (NPI)

(10) NPI: Negative polarity items (NPIs) are expressions that can only appear felicitously in negative contexts. (van der Wouden (1997))

- (11) a. 去年は、ちっとも貯金ができなかった。
b. *去年は、ちっとも貯金ができた。

(11): 否定辞「ない」により、NPI「ちっとも」が認可される。

†弱い否定極性項目 (van der Wouden (1997), 吉村 (2000))

- (12) 花子はアルコールを少しも飲まなかった。
(13) a. *花子はアルコールを少しも飲むことを拒否した。
b. *もし花子がアルコールを少しも飲めば、忘年会が楽しくなるだろう。
c. *女性の中でアルコールを少しも飲んだのは、せいぜい5人だ。
d. *花子はアルコールを少しも飲んだ。

(五十嵐 (2011: 46), 下線発表者)

(12): 「少しも」は否定環境のみに生起可能な NPI

(13): 否定を含意する動詞「拒否する」、条件節「もし」、「せいぜい」、肯定環境は NPI である「少しも」を認可できず、「ない」のみそれが可能。

- (14) a. 花子はアルコールを少しでも飲むことを拒否した。
b. もし花子がアルコールを少しでも飲めば、忘年会が楽しくなるだろう。
c. 女性の中でアルコールを少しでも飲んだのは、せいぜい5人だ。
d. *花子はアルコールを少しでも飲んだ。

(五十嵐 (2011: 46), 下線発表者)

(14)の「少しでも」: 「少しも」より幅広い環境で許容され、肯定環境のみ出現不可能。

→ 肯定環境での生起が許されない点では NPI だが、認可条件が「少しも」より弱い。

→ 強い NPI と弱い NPI が存在する (van der Wouden (1997), 吉村 (2000))。

†強い NPI と弱い NPI

(15) : Laws of polarity (van der Wouden (1997: 130), 吉村 (2000)も参照)

- (15) a. Weak NPIs are expressions that can occur felicitously in monotone decreasing contexts.
- b. NPIs of medium strength may be licensed by anti-additive contexts but not by downward monotonic ones.
- c. Strong NPIs may only be licensed by anti-morphic contexts.

monotone decreasing 特性 : 最も弱い否定文脈を与える特性 (NPI が現れる全環境で成立)

anti-additive 特性 : 中間的な否定文脈を与える特性

anti-morphic 特性 : 最も強い否定文脈を与える特性

「せいぜい」 : monotone decreasing / 「拒否する」 : anti-additive / 「ない」 : anti-morphic

(12)と(13)の「少しも」 : anti-morphic な「ない」のみによって認可される強い NPI

(14)の「少しでも」 : anti-additive な「拒否する／もし」や monotone decreasing な「せいぜい」に認可される両極項目

* 両極項目は、弱い否定極性と弱い肯定極性を併せ持つので、NPI と違い、「ない」には認可されない。(吉村 (2000)、五十嵐 (2011))

- (16) 日本語の NPI の認可 : 強い NPI は anti-morphic な要素である否定の認可子により統語構造において c-command されることにより認可されなければならないが、弱い NPI は統語構造での c-command のみならず、否定を含意する様々な認可子や否定的なコンテキストを含む環境において認可されうる。

統語派生における、否定辞による NPI の認可 : Klima (1964), Kishimoto (2018)

(15b) : 中間的な NPI は、何らかの演算子や「せいぜい」など質量を規定する要素に、統語構造上、または論理意味部門に相当するインターフェイスで認可されている可能性。

3. Weak NPI としての「NらしいN」表現

†「NらしいN」表現が出現可能な環境

- (17) a. 浪費家の父は、貯金らしい貯金を少しでもするのを拒否した。
- b. もし、雨らしい雨が少しでも降れば、水不足は解消するだろう。
- c. 今夏、雨らしい雨が少しでも降ったのは、せいぜい4、5日間だった。

(17) : (i) 「NらしいN」は、anti-morphic な「ない」(1参照)、anti-additive な「拒否する」、monotone decreasing な「せいぜい」にそれぞれ認可される。

(ii) WNPI の性質をもつ「少しでも」と共起可能。

- (18) a. (i) *私は去年、貯金らしい貯金をした。
 (ii) (これまではできなかつたが)最近、ようやく、貯金らしい貯金ができるようになった。(= (4b))
 b. {ずっと雨が降らなかつたが、昨日/*毎日雨続きで、昨日も}、雨らしい雨が降った。
 c. 今年も、ちゃんと研究らしい研究ができて良かった。

(18) : 肯定環境には基本出現不可能だが、否定のコンテクストがある場合のみ許容度が改善される。

→否定のコンテクストが弱い NPI を認可する可能性

† 「NらしいN」が表す「基準値」

「NらしいN」:「本当にNといえるようなN」(山下 (1995: 196))

→「Nといえる最低限の基準値を満たしているN」

(19) NPIとしての「NらしいN」: Nといえる最低限の基準値をNが満たしていることを否定する環境に出現する。

(20) 研究らしい研究ができなかつた。

= 研究といえる最低限の基準値を満たしている研究ができなかつた。

(21) 日本語の両極項目は、Minimizer と呼ばれている最小値を表す語句・表現、もしくは、最小値を含意する語句・表現である。(五十嵐 (2011))

Minimizer : 最小の量を表す NPI、否定の強調 (Horn (2001))

← WNPI の性質をもつ両極項目と同じように、WNPI も Minimizer である。

「NらしいN」:「最低限の基準値」を表す Minimizer

† 名詞派生形容詞を形成する接辞 (cf. 山下 (1995))

(22) a. 彼の作り話はいかにも {*嘘らしい/嘘っぽい/嘘くさい}。(= (7b))

b. 先生らしい/男らしい/夏の雨らしい/政治家らしいあくどいやり方

c. 彼はいかにも先生らしい先生だ。

「らしい」「っぽい」「くさい」: 基体 NP が示す良いまたは悪い特徴が際立っていることを含意

→ 基体 NP が示す良いまたは悪い特徴が「基準値」を超えて際立っている。

→「最低限の基準値」を表さないなので、NPI として機能しない。

(23) a. 彼は、所謂先生らしい先生ではない。

b. 気さくな彼は、エリートらしくないエリートだ。

- (23a): 「彼」がもつ「先生」といえる性質は、基準値を超えて際立っていない。
(23b): 「彼」が「エリート」といえる性質をもっていないことが、基準値を超えて際立っている。

- (20) 研究らしい研究ができなかった。
= 研究といえる最低限の基準値を満たしている研究ができなかった。

→ 「基準値」という概念と弱い NPI との関わりの重要性

4. 結論

参照文献：

- Horn, Laurence R. (2001) *A Natural History of Negation* (2nd edition). CSLI Publications, Stanford.
- 五十嵐祐太. (2011) 「極性項目の認可条件に関する一考察」, 『岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要』第 20 号, 39-49.
- Kishimoto, Hideki. (2018) “Projection of Negative Scope in Japanese,” 『言語研究』153, 5-39.
- Klima, Edward S. (1964) “Negation in English,” In Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz (eds.) *The Structure of Language*, 246-323. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 高橋勝忠. (2015) 「『一っぽい』の考察：『一っぽさ』と-ishness の関係について」, 『英語英米文学論輯：京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』14, 33-49.
- van der Wouden, Ton. (1997) *Negative Contexts: Collocation, Polarity and Multiple Negation*. Routledge, London.
- 山下喜代. (1995) 「形容詞性接尾辞『一っぽい・一っらしい・一っくさい』について」, 『講座日本語教育（第 30 分冊）』, 183-206, 早稲田大学日本語研究教育センター.
- 吉村あき子. (1999) 『否定極性現象』, 英宝社.
- 吉村あき子. (2000) 「*一滴でも飲まなかった。／*飲んだ」, 『言語』第 29 巻第 11 号, 52-58.